

PROGRAM

ワーグナー：楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」より 第1幕への前奏曲

Richard Wagner: Die Meistersinger von Nürnberg, Prelude to Act 1

プッチーニ：歌劇「トスカ」より“歌に生き、恋に生き”

Giacomo Puccini: “Vissi d'arte, vissi d'amore” from “Tosca”

【ソプラノ】並河 寿美

ビゼー：歌劇「カルメン」より“ハバネラ”

Georges Bizet: “Habanera” from “Carmen”

【メゾ・ソプラノ】清水 華澄

プッチーニ：歌劇「蝶々夫人」より“花の二重唱”

Giacomo Puccini: “Flower Duet” from “Madama Butterfly”

【ソプラノ】並河 寿美 【メゾ・ソプラノ】清水 華澄

マスカーニ：歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」より 間奏曲

Pietro Mascagni: Intermezzo from “Cavalleria Rusticana”

ビゼー：歌劇「カルメン」より“闘牛士の歌”

Georges Bizet: “Toreador Song” from “Carmen”

【バリトン】甲斐 栄次郎

ヴェルディ：歌劇「リゴレット」より“女心の歌”

Giuseppe Verdi: “La donna è mobile” from “Rigoletto”

【テノール】行天 祥晃

ベートーヴェン：交響曲 第9番 ニ短調 op.125 「合唱付き」より

Ludwig van Beethoven: Symphony No. 9 in D minor, op.125 “Choral”

第4楽章 プレストーアレグロ・アッサイ

Presto – Allegro assai

【ソプラノ】並河 寿美 【メゾ・ソプラノ】清水 華澄 【テノール】行天 祥晃 【バリトン】甲斐 栄次郎

【合唱】ひょうごプロデュースオペラ合唱団 【合唱指揮】石原 祐介

字幕／藤野 明子 当楽団演奏会での字幕を一手に担っていただいております藤野明子氏が11月に急逝されました。
生前の多大なるご活躍に敬意を表しますとともに、ご冥福を心よりお祈りいたします。

ワーグナー：楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」より 第1幕への前奏曲

「たとえ塵芥の中に神聖ローマ帝国が滅びようとも、生き続けるのだ、聖なるドイツの芸術は！」主人公が訴えかけるこのような芸術賛美／音楽賛美のメッセージで大団円を迎えるのが、楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』だ。中世ドイツを舞台に、都市の文化を支える親方たちの活躍を描いた内容。19世紀のドイツ・オペラに一時代を画したワーグナーが作曲と台本を一手に引き受け、1867年に完成させた。幕開けに演奏される第1幕への前奏曲は、これから始まる壮大なオペラ＝楽劇への期待感をいやが上にも高める祝祭感と高揚感に溢れたもの。冒頭に掲げた主人公のメッセージが発せられる劇大詰めの部分のメロディを、後半部分で予告してゆくという仕掛けだ。

プッチーニ：歌劇「トスカ」より“歌に生き、恋に生き”

ドイツとくれば、ヨーロッパのもう1つの音楽の中心地がイタリアだ(いやドイツよりもイタリアの方こそ、何世紀にもわたって音楽の中心地として栄え続けた)。そうした伝統を19世紀末から20世紀初頭にかけて継いだ代表格の作曲家が、プッチーニ。男女の間に繰り広げられる様々な愛憎を、むせかえるほどロマンティックな音楽を駆使して描き続けた。オペラ『トスカ』は、ナポレオンがヨーロッパに軍勢を進めていた18世紀末の動乱期のローマが舞台。歌姫トスカを狙う警視総監の前で、拷問にかけられたる恋人を救いたいと願う彼女が、過酷な運命を嘆き神に助けを求める絶唱『歌に生き、恋に生き』等、名曲が詰まった作品だ。

ビゼー：歌劇「カルメン」より“ハバネラ”

世代的にはワーグナーとプッチーニのちょうど間に位置する作曲家の1人が、フランスのビゼー。すい星のごとく現れ、生き急ぐように世を去った彼が、晩年に放った大ヒットオペラこそ『カルメン』である。フランスの作家メリメが発表した同名の小

説を基としており、真面目な伍長のホセが、奔放なロマの女性カルメンの魅力に溺れてゆくというストーリーだ。全曲にわたってスペイン風の音楽が満載で、特にカルメンがホセを誘惑する『ハバネラ』はその典型的ナンバーといえる。ただし、ビゼー自身はスペインに足を踏み入れたことは1度もない。さらに『ハバネラ』のメロディが当時のスペインの流行歌を無断借用したということで、盗作問題にまで発展してしまったといういわくつきの1曲だ。

プッチーニ：歌劇「蝶々夫人」より“花の二重唱”

オペラ『蝶々夫人』も、プッチーニの作品。開国期の日本を舞台に、没落した武士の娘で芸者に身をやつした蝶々さんと、アメリカ人士官ピンカートンとの間に繰り広げられる悲恋物語である。中でも『花の歌』は、アメリカからなかなか戻ってこないピンカートンを待ちわびる蝶々さんが、侍女とともに歌い上げる、憧れや不安を宿した二重唱だ。

マスカーニ：歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」より 間奏曲

プッチーニと同時代に活躍したイタリアの作曲家の1人がマスカーニ。プッチーニ以上に、週刊誌ネタになりそうな男女の愛憎劇をテーマにしたオペラを得意とした。『カヴァレリア・ルスティカーナ』はそんな彼の代表作だ。特に途中で演奏される間奏曲は、直後に起こる愛憎のもつれゆえの惨劇が始まる直前に奏でられ、美しくやるせない音楽で聴き手の心をわしづかみにする。

ビゼー：歌劇「カルメン」より“闘牛士の歌”

『闘牛士の歌』は、先ほどの『カルメン』に登場する大ヒットナンバーの1つ。人気の闘牛士エスカミーリョが登場する場面で歌われ、獰猛な牛を追い詰めるスリリングな様子が、歌とオーケストラで表現される。(なおこのオペラのヒロインのカルメンはエスカミーリョに口説かれ、自分で誘惑したホセを捨てることとなるのだが。)

ヴェルディ：歌劇「リゴレット」より“女心の歌”

ワーグナーと同年であり、プッチーニの先輩格にあたる19世紀半ばのイタリアの代表的オペラ作曲家がヴェルディだ。華やかなメロディの裏側に、様々な社会問題を鋭く描いた作品の数々で定評があるが、『リゴレット』もその1つ。プレイボーイで知られる公爵が自分に仕える道化のリゴレットの娘を誘惑するものの、それに激怒したリゴレットが復讐を思い立つ、という内容だ。『女心の歌』は、様々な女性を知り尽くした公爵によって歌われ、陰惨なオペラの内容とは対照的に、煌びやかなまでの陽気さに彩られている。

ベートーヴェン：交響曲 第9番 ニ短調 op.125 「合唱付き」より 第4楽章

演奏会の最後を飾るのは、ベートーヴェン晩年の傑作『交響曲第9番』（「第九」）の第4楽章だ。18世紀末から19世紀初頭にかけて活躍した彼の音楽は、実のところ本日演奏された彼以降のすべての作曲家に影響を及ぼしている。またそれほどまでに、ベートーヴェンによって切り拓かれた道は、一つ音楽の分野にとどまらないインパクトをもたらしたといえるだろう。典型的な存在が「第九」の第4楽章であって、それまではオーケストラだけで演奏されることがほとんどだった交響曲に、大規模な声楽を導入した。しかも、テキストとして用いられたシラーの革命詩『歓喜に寄す』を改編し、単に政治的なマニフェストにとどまらない、歓喜に満ちた音楽芸術への賛美、またそれが生み出す理想社会への賛歌を生み出した。

つまりベートーヴェンは、文字通り「音楽の力」を、自分の作品を通じて鮮やかに示し続けた。またそうした彼の姿勢があったからこそ、今日もお私たちは「音楽の力」「芸術の力」を信じて、開館15年目を迎えたこのセンターに集まり続ける。